

やすさに起因する普及の違いと有償ソフトの高額が原因であると考えられた。また、「マルチメディア DAISY 教材」が 61 人(78%)、「DAISY 教材」が 47 人(60%)であった。DAISY 形式による教材、試験問題の作成は墨字、点字、カセットテープによる作成に比べ教官に浸透していないと考えられた。

以上のことから、次年度の研究課題について下記のように提案する。

- (1) 詳細なインターネット活用状況の分析
- (2) ICT 活用スキルの分析
- (4) 教材の作成方法と共有化、プレゼンテーション力向上に向けての検討
- (5) 5 センターのネットワーク化による E-learning 実施の可能性の検討

調査結果について、さらなる検討を加え、ネットワーク環境を利用した情報の収集と交換、マルチメディアによる教材の作成環境、入所者の学習環境から、インターネットを活用した教育訓練プログラムを検討したい。

D. 健康危機情報

なし

E. 研究発表

なし

厚生労働科学研究費補助金 感覚器障害研究事業

分担研究報告書

パソコンを活用した理療教育訓練プログラムのあり方の研究

分担研究者 加藤博志

国立身体障害者リハビリテーションセンター更生訓練所 教務統括官

研究要旨

視覚障害にとってパソコンは、読み書きを目的とした点字やテープに代わる手段のほか、ネットワーク環境下での使用により情報検索、情報の蓄積と整理、発信に応えるものとして職業に活用するうえでも重要な存在となっている。本研究では、理療教育を基礎に視覚障害者が施術者としてパソコンを活用していくために必要な情報教育環境のデザインを検討し、問題解決型学習を到達目標にした教育訓練プログラムについて研究することを目的としている。初年度は、パソコン使用を目的とした情報支援・教育環境について理療教育を行っている国立援護施設を対象に調査した。その結果、教育訓練プログラムのあり方を検討するには、自己学習に欠かすことのできない入所者宿舎内でのパソコン使用環境の分析が課題の一つとして明らかになった。

研究協力者：

秋山 仁（国立塩原視力障害センター 教務課）

池田和久（国立福岡視力障害センター 教務課）

A. 研究目的

本研究では、視覚障害者がパソコンを最適な学習環境で活用し、課題探求・分析的評価能力の向上を図るような理療教育訓練プログラムのあり方を検討し、問題解決型学習の推進をめざすことを目的としている。

国立援護施設(以下、センター)は、入所による宿舎生活を送りながら訓練に参加できるというのが特徴である。パソコン使用に関わる訓練は2つの課程で実施されている。1つは生活の利便性を図る生活訓練課程である。当該課程では、情報支援を中心に個々

のニーズに応じた訓練プログラムが個別に実施されている。2つめは、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師を養成する理療教育課程である。当該課程では、理療を学ぶために必要な学習手段の一つとして、授業科目である情報概論を中心に全体学習として実施されている。

初年度は、教育訓練プログラムのあり方を検討するのに当たって、パソコンを活用するために必要な学習環境調査を理療教育課程のある5つのセンターを対象に実施した。また、本年度は、生活訓練課程の支援環境も併せて調査した。

B. 研究方法

目的：国立援護施設のパソコン活用環境を把握する。

対象：理療教育課程、生活訓練課程を有

する国立援護施設5ヵ所（函館、塩原、神戸、福岡、所沢）

期 間：平成18年12月16日～2月末日

方 法：質問表による調査

項 目：(1) センター全体の環境（施設整備に関して DAISY について その他の支援機器 特記事項）(2) 情報概論の授業について（ハードウェア ネットワーク ソフトウェア 授業の実態）(3) 情報概論以外の科目について（継続してパソコンを使用している科目）(4) 生活訓練課程のパソコン訓練について

C. 結果および考察

本調査の結果から、環境整備に関連する事項と授業や訓練における目標や工夫をとりあげ考察を加えた。

(1) センター全体の環境

1) 構内 LAN

全てのセンターに整備されているが、一般教室における整備がなされているのは3センターであった。また、入所者宿舎での整備にいて、4センターは、なしと答えた。

1 センターについては、整備が予定されていた。

2) 入所者宿舎でのインターネット利用の可否

4センターが不可であった。1センターは検討中である。

3) 入所者宿舎でのインターネット利用の方法

1センターにおいて、個人所有のパソコンによる接続を前提に整備がすすめられている。他のセンターでは、センター内で場所を限って使用を許可している他、入所者自身のPHSなどによる個別契約や、宿舎自

治会での自主運用など、各センターが様々な方法をとっていた。

入所者がパソコンを活用して学習する場面の一つとして、宿舎での活用は今後の重要な環境構築と考えられた。また、閲覧できるホームページの制限や利用料の考え方なども併せて整備する必要がある、どのセンターも慎重にすすめていることがうかがえた。

(2) 情報概論について

1) パソコンの更新

最も新しい更新は、平成16年で実施され2センターが該当していた。

2) ネットワーク

パソコンを配置している専用教室のLAN環境は4センターが整備されている。

3) ソフトウェア

主なスクリーンリーダーとしては、PC-Talkerが4センターで用いられていた。また、外字環境、Webブラウザ、メールソフトなどは、各センターが様々なものを用いていた。

4) 授業の実態

授業時間数は、4センターが1学年の実施で週当たり1時間配当としている。チームティーチングの導入や情報倫理の育成をめざすなどセンターごとに工夫がなされていた。そして、授業の課題やその他の項目に、電子カルテへの取組みが3センターであげられていた。

(3) 情報概論外の授業

全てのセンターが情報概論以外の授業でパソコンを使用した科目を設定していた。工夫している点では、理療教育学習・評価支援システムの導入（受験対策等）や情報概論の授業との連携、理療経営で学んだこ

とを深めるために必要なインターネットの活用があげられていた。具体的な到達目標に関しては、臨床実習でのカルテ記載、施術者としての情報収集能力・問題解決能力を養う他、個別課題の設定があげられていた。専門教育を実践していくにあたり重要な役割を担う授業であると考えられた。

(4) 生活訓練課程のパソコン訓練について

1) パソコンの更新

最も新しい更新は、平成 17 年で実施され 2 センターが該当していた。予算に応じた台数更新が 2 センターみられた。

2) ネットワーク

パソコンを配置している専用訓練室の LAN 環境は 4 センターで整備されている。

3) ソフトウェア

主なスクリーンリーダーとしては、PC-Talker が 2 センター、PC-Talker と XP-Reader の 2 つと答えたのは、3 センターであった。また、外字環境、Web ブラウザ、メールソフトなどは、各センターが様々なものを用いていた。

4) 訓練の実態

訓練時間数は、訓練生 1 人あたり 3~4 時間、多いところで 6 時間であった。また、具体的な到達目標は、文書作成から就職復帰に向けた技能習得など様々な設定が全センターさなされていた。そして、工夫としては全てのセンターに共通して個別ニーズへの対応をあげていた。さらに、課題として、訓練修了後の後支援、職員の技術向上などがあげられていた。

個別対応という細やかな支援は、理療教育課程希望者にとって、情報教育の基礎を修得するうえでも重要である。また、今後のプログラムのあり方を考えるうえでも生

活訓練課程は欠かすことのできない存在といえる。

以上のことから、次年度に具体的な訓練プログラムのあり方を検討するために研究課題を下記のように提案する。

- (1) 宿舎環境におけるパソコン学習デザインとモラル教育に関わる外部調査と分析
- (2) 各センターにおける情報概論の授業の特徴や工夫のさらなる分析
- (3) 専門性の高い理療情報修得に関わるサクセスモデル抽出と分析
- (4) パソコンを活用した理療教育モデル授業の評価
- (5) 理療教育課程の情報基礎教育に必要な訓練プログラムのあり方の検討

授業や訓練で用いるパソコンを始めとした環境整備は、予算の執行状況などを要因とし、各センターでの違いが生じていると考えられた。授業の実態調査から理療教育に必要なパソコンを活用した情報教育は各職員による工夫により支えられていた。以上のことを踏まえ、訓練プログラムのあり方を検討したい。

D. 研究発表

なし

厚生労働科学研究費補助金（感覚器障害研究事業）

分担研究報告書

理療教育モデルの研究開発

分担研究者 舘田美保

国立身体障害者リハビリテーションセンター 理療教育部 厚生労働教官

研究要旨

視覚障害者を対象にした理療教育ではマルチメディアを利用した学習技術、学習環境についての研究は始まったばかりである。本研究では、理療教育における音声・テキスト・画像・点字の複数の情報チャンネルから構成されるマルチメディアの活用を試み、その有効性を明らかにしようとしている。初年度となる本年度の研究では、モデル開発のための基礎情報を得るために視覚障害者への理療教育を実施している国立施設の入所者を対象に学習に必要な「読み」と「書き」の手段におけるパソコン使用状況について調査した。その結果、半数近く（44%）の者が「読み」と「書き」の場面でパソコンを使用していることが明らかになった。

研究協力者：

安田晴幸（国立函館視力障害センター 教務課）

伊達徳昭（国立神戸視力障害センター 教務課）

A. 研究目的

本研究では理療教育に有効なマルチメディアを活用した情報とコミュニケーション手段を検討することで、学習に必要な「読み」と「書き」とどまらず、より専門性の高い情報を得られるシステムを開発し、それを理療教育モデルとして提言することを目的としている。

理療とは、あん摩マッサージ指圧、鍼灸療法のこと、盲学校や国立視力障害センター等、視覚障害者を対象とする学校・養成施設で特に使用されている用語である。理療を深く理解するためには、機能と構造

などの基礎医学を始め、視覚障害者にとって難解な漢字文化を背景とした東洋医学系の情報を得ることが必要である。その情報を効率的に得るために、従来の点字、墨字、カセットテープだけではなく、音声・テキスト・画像・点字などの複数の情報チャンネルから入所者が個々の特性にあわせたものを組合せて選べるマルチメディアコンテンツの果たす役割は大きいと考えられる。初年度は、マルチメディアを活用するさいに必要なとなるパソコンについての使用状況について調査した。

B. 研究方法

(1) 学習状況調査

目的：学習状況を把握するため

対象：国立身体障害者リハビリテーションセンター（以下、国リハ）理療教育部、国立函館・塩原・神戸・福岡視力障害センタ

一 (以下、視力センター) 理療教育課程 在籍者 387 名 回答者数 328 名

方法：学習状況調査により得られた回答のうち、特にパソコンを学習場面で使用する者を抽出し、年代・視力区分・学習手段等から状況を分析し、全体比とも比較した。

調査期間：平成 17 年 12 月下旬～平成 18 年 2 月上旬

なお、この質問紙における項目、および調査の方法と結果については分担研究報告書「弱視者の理療教育環境に関する研究」で述べられている。

(2) 米国 American Printing House for the Blind (以下、APH)、Stanford 大学への訪問調査

目的：教育モデル環境の比較検討

C. 結果

(1) 学習状況調査結果

パソコンを所有する者は、協力者全体 328 名中、180 名 (55%) であった。そのうち、学習 (読みと書き) で使用する者は 144 名 (44%) であった。さらに使用目的を分類すると、パソコンを読みの手段として使用すると答えた者は 121 名、書きの手段として使用すると答えた者は 127 名であった。なお、本調査において、読みとは、教科書・配布教材を読む場面、書きとは、メモ・ノートづくりの場面として設定し、授業と自己学習場面の別については問わない。

1) 年齢状況 (144 名)

30 代と 40 代で 60% に達し、20 代が 17%、50 代が 17% であった。年代の全体比は、30 代は 24%、40 代は 25%、50 代は 27%

となっている。

3) 視力区分 (144 名)

0.01～0.02 の領域が最も多く、15% であった (全体比 16%)。0～指数弁までの領域は、25% であった (全体比 20%)。

4) 教科書・配布教材を読むときに用いる者 (複数回答 121 名)

パソコン (ノートパソコン) の使用については 90% で、全体比は 33% であった。墨字の使用は 60% と、全体比 (71%) に比べ低くなり、点字は 21% と全体比 (13%) に比べ高かった。カセットテープレコーダーやプレックストークポータブル (PTR-1) などの DAISY 再生ツールの使用率 (前者 58%、後者 32%) も全体比 (前者 44%、22%) に比べ高かった。拡大読書器 (据置型) やルーペは、全体比 (前者 30%、後者 37%) と同等であった。

5) メモ、ノートづくりに用いるもの (複数回答 127 名)

パソコン (ノートパソコン) は 87% であった。墨字の使用は 58% (全体比 71%)、点字の使用は 16% (全体比 11%) であった。ルーペは全体比 (25%) より低く (19%)、拡大読書器は、全体比 (22%) と同等であった。

6) 視力区分 0 と 0.01～0.03 までの各群におけるパソコン利用

教科書配布教材を読むとき、またメモ・ノートづくりにパソコンを利用するのは、視力区分 0 群のほうが、0.01～0.03 までの各群に比して高かった。特に教科書配布教材を読むとき、0 群は 52%、0.01～0.02 群は 33% であった。

(2) 米国での調査報告

Stanford 大学の Wallenberg Hall の訪問では、IT を基調にした教育モデルがみとすべき 2 つの条件を得られた。その条件の 1 つは、学生が情報の活用を至るところで行うことができるようにするということである。2 つめは、学生間のコミュニケーションが絶えまなくできる多目的な空間の確保である。特徴的であったのは、教室に配置された巨大なスクリーンと教室外の壁に設けられたコミュニケーションを自由に図ることができるボードの存在であった。教室のあらゆる場所が、パソコンを使用できるだけではなく、コミュニケーションをとるための設備のととのった空間として設計されていた。また、APH の運営では、視覚障害者の情報コンテンツを技術革新による媒体の変化に合わせ情報発信を行っていくサービスを当事者の参加による設計により有していた。

APH の取り組みについての、検討課題としては、マルチメディア教科書・教材のともなう著作権問題が重要であるように見受けられた。

D. 考察

パソコン所有者の中で、実際に使用していない者が全体の 10% (180 名中 44 名) 近く存在している。この原因の一つとして、施設入所であるにも関わらずパソコンの利用に対する個別支援の環境が十分に調っていないことが考えられる。

パソコンを最も使用している年代は、30 代・40 代 (併せて 60%) と全体比に比べ若い郡であったが、これは一般的な傾向と考えられる。

パソコンを利用している者は、音声再生

ツールを組合せる割合が高かった。これは、音声再生ツールを用いながらもパソコンを中核とした視覚代償機器を望んでいることが考えられる。

パソコン利用と視力との関係では、視力区分の値が低くなるとパソコン利用が高くなる傾向があった。「読み」と「書き」に対応するツールとしてパソコンが最適なものとして使用されていると考えられる。

以上のように、今年度得られた学習状況調査の結果と米国での調査結果から、以下のように次年度に向けた研究課題を提案したい。

(1) 授業場面でのパソコン使用調査

授業中にパソコンを使用している者を対象に、パソコン使用の状況を探る。

(2) 学習環境調査

国リハ、視力センターにおける情報、教室環境等の調査結果から問題点と課題を探る。

(3) 音声の利用と種類の調査

利用者の音声依存度の割合を明らかにし、音訳とシンセサイザーによる読みの評価を実施し教材開発のための基礎情報とする。

(4) マルチメディア DAISY による教材開発

音声・テキスト・画像・点字を同期させた教材を開発する。基礎医学では特に画像、東洋医学系では音声再生ソフトの詳細読みなど、教科の特性に応えた試作版を開発し利用者から評価をうける。

(4) 授業モデル

マルチメディア教材を利用した授業モデルを実施する。授業を提供する研究協力者や教官、授業を受ける入所者による相互評価からモデルを提案する。

理療教育モデルの条件設定において、パ

ソコンは学習手段の1つとし有効と考えられた。

以上のことを踏まえ、引き続き学習状況調査の分析を加え検討したい。

E. 研究発表

なし

厚生労働科学研究費補助金 研究事業

分担研究報告書

弱視者の理療教育環境に関する研究

分担研究者 小林好彦

国立塩原視力障害センター 厚生労働教官

研究要旨

国立身体障害者リハビリテーションセンター理療教育部及び、国立函館、塩原、神戸、福岡視力障害センターの理療教育課程で学習する入所者の 13.4%が点字問題、75.9%が墨字問題で試験を受けている。点字使用者も墨字使用者もカセットテープ、DAISY 再生機、拡大読書器、ルーペ、パソコンなどを複数組み合わせた学習スタイルを構築している。今後この学習スタイルに適した学習環境と教材の提案を試みていく予定である。また、目の疲労度及び、録音教材を、いかに組み合わせるかについての調査を実施したい。

研究協力者：

秋山 仁（国立塩原視力障害センター
教務課）

宍戸新一郎（国立神戸視力障害センター
教務課）

訓練所理療教育部（以下、リハセンター）及び、国立函館、塩原、神戸、福岡視力障害センター（以下視力センター）では各入所者の視覚障害を保障して理療の学習を円滑に遂行するために点字、パソコン、拡大読書器、DAISY 図書再生機などの使い方について支援を実施しているが、リハセンター及び視力センター入所者の状況について、同じ尺度で収集したデータはない。この学習状況の分析は、次年度以降計画しているマルチメディア DAISY による教材の開発や教室環境プロトタイプ提案のための重要な基礎情報となる。

本年度は、主として下記のような調査を実施し、その成果を利用してマルチメディア DAISY 教材の製作にも着手している。

A. 研究目的

本研究では、国立身体障害者リハビリテーションセンター理療教育部及び国立函館、塩原、神戸、福岡視力障害センター理療教育課程で理療の学習を進めている入所者が、視覚障害を保障するために用いている学習技術を明らかにし、現在各センターで提供している支援技術の再構築を図るとともに入所者の理想的な学習環境を提案することを目指している。

一般に、成人した後に失明した人々の点字修得は極めて困難であり、中途失明者の多くは弱視であるとされている。国立身体障害者リハビリテーションセンター更生

- (1) 学習状況調査
- (2) サクセスモデル調査
- (3) 米国 American Printing House for the Blind と Stanford 大学訪問調査

B. 研究方法

平成 17 年度にリハセンター及び各視力センターの理療教育課程に在籍する入所者全員に対するアンケート形式で実施した。各センターの研究協力員にアンケート用紙及び、実施要領を送付し、各センターの実状に合わせた方法での実施を依頼した。また実施に当たっては各センター所長から実施について承諾を受けた。

学習状況調査の調査項目は、1)属性 2)使用文字区分 3)点字触読レベル 4)視力区分 5)視野の状態 6)聴覚の状態 7)教科書、配布教材を読むときに用いるもの 8)メモ、ノート作りに用いるもの 9)学習用具所有状況 10)新しく購入したPCのインストールと設定 11)PCの画面読み上げソフト 12)PCで使うエディタ 13)DAISY 図書再生ソフトなどについてであった。サクセスモデル調査は、教科書、教材を読むときに用いる学習方法とノートやメモをとる時に用いる方法を具体的に聴取する形式で各センターの「上手に学習を行っている入所者」若干名の協力を得た。アンケートの実施に先立ち、趣旨を説明し、調査協力署名用紙（同意書）に署名を求めた。

本研究は国リハ倫理審査委員会（平成 17 年 10 月）で承認されている。

C. 調査結果の概要

今回のアンケートでは、328 人から回答を得ることができた。結果の概要を以下に記す。

- 1)属性は女 56 人、男 272 人、年齢は 50 歳代が最も多く 83 人、ついで 40 歳代 82 人であった。
- 2)使用文字区分では、点字問題使用者が 46

人、そのうちテープの併用を必要としない者 4 人であった。

3)点字触読レベルについては、点字問題使用者 44 人中 11 人はほとんど読めないと申告している。

4)視力区分では、0.01 から 0.02 の領域に属する者が 50 人で最も多かった。

5)視野の状態では、238 人が欠損を有している。

6)聴覚の状態では、聞こえにくい者又は、障害認定を受けている者を合わせて、51 人であった。

7)教科書、配布教材を読むときに用いるものは、点字 43 人、墨字 234 人、DAISY 再生機 201 人、カセットテープレコーダー 143 人、パソコン 131 人、拡大読書器 110 人、ルーペ 122 人であった。

8)メモ、ノート作りに用いるものは、点字 35 人、墨字 232 人、DAISY 録音再生機 51 人、カセットテープレコーダ 96 人、パソコン 135 人、ルーペ 83 人、拡大読書器 81 人であった。

9)学習用具所有状況は、DAISY 再生機 149 人、ルーペ 161 人、拡大読書器 139 人、カセットテープレコーダー 224 人、デスクトップ PC 55 人、ノート PC 157 人、携帯電話 228 人であった。

10)新しく購入した PC のインストールと設定については、依頼先などがわからない者は 11 人であった。

11)PC の画面読み上げソフトについては、PC-TALKER 61 人、95Reader 29 人であった。

12)PC で使うエディタの主なものは、MS ワード 98 人、メモ帳 55 人であった。また、点字エディタはほとんど使用されていない。使用しているのは、全センターで 4 人だけ

であった。

13)DAISY 図書再生ソフトも全体で 41 人が使用している。

D. 考察

本年度調査で、リハセンター及び、視力センター入所者について以下のような状況が明らかになった。

- (1)点字使用者の割合が低く、墨字使用者割合が高い。(点字問題の利用者は全体の 13.4%)
- (2)点字問題を使用する者でも実用的に使えるものは少なく、カセットテープによる音声情報を合わせて使用している。
- (3)墨字を使用する者で、拡大読書器、ルーペを使用している者が相当数ある。
- (4)DAISY 図書再生機は、点字利用者にも、墨字利用者にも広く活用されている。
- (5)パソコンを所有している者が 65%に達している。
- (6)携帯電話を所有している者が 70%近く存在する。

本年度併せて実施したサクセスモデル調査結果と併せて分析すると、理療教育課程で学習する入所者は、点字、墨字、拡大読書器、ルーペ、カセットテープレコーダー、DAISY 図書の録音再生機、パソコンなどを複数組み合わせる学習スタイルを構築していることがわかる。弱視者の学習環境の支店からは、視力区分が手動弁に属する者 16 人中 5 人 31.3%、指数弁に属する 4 人中 2 人 50%が教材を読む時に墨字を使用している。このことから、かなり低い視力と考えられる手動弁や指数弁に属する者の中にも、文字の提示方法を工夫することによって学習に視覚を使うことができる者が含まれて

いることが明らかになった。この視力群に対しても音声で読み上げながら、その文字を画面に表示するマルチメディア DAISY の有する表示スタイルに工夫することで学習の一助となることが推測できる。

本年の米国スタンフォード大学の Wallenberg Hall の訪問では、「教室は学生のニーズに合わせてその形を変える必要があり、それに IT が大きく貢献できる」ことを目の当たりにした。次年度は本調査で得られたデータを基礎に、リハセンター及び各視力センターに在籍する弱視者に適したマルチメディア DAISY の文字提示モデル、学習環境モデル、教室環境モデルなどを提案していく。

また、拡大読書器、ルーペを使用して学習を進めている入所者が多いことから、目の疲労度及び、録音教材を、いかに組み合わせるかについての調査を実施したい。

E. 健康危機情報

なし

F. 研究発表

なし

研究成果の刊行に関する一覧表レイアウト (参考)

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
河村宏, 横田恒一, 濱田麻邑編		河村 宏	Multimedia for All			2005	

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
野村美佐子, 河村宏	河村宏. 世界情報社会サミットと障害	日本生活支援工学会誌	Vol15, No.1	14-18	2005
河村宏	デジタル・オポチュニティ: 参加を支援するITの時代	リハビリテーション	No. 481	32-35	2006
河村宏	障害のある人々の防災活動参加	ノーマライゼーション	25(7)	10-13	2005

200500624

本研究報告書には DVD が添付されています。内容に関しては次ページをご覧ください。

Multimedia for All (みんなのためのマルチメディア)の見方

この DVD は、2005 年 11 月に、チュニジアのチュニスで開催された国連世界情報社会サミットで開催された、「障害者の防災と情報コミュニケーション技術のあり方を考えるセッション」で配布されたものです。

アクセシブルなマルチメディアのサンプルや国連世界情報社会サミットの公式文書などが入っています。内容はすべて英語もしくはその他の国連公用語を使用したものです。

■ DVD に入っているコンテンツ

自閉症と防災に関する DAISY

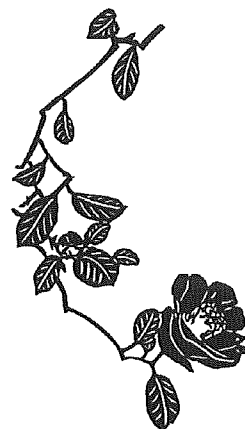
- ・ Practical Solutions to Everyday Challenges for Children with Asperger Syndrome
アスペルガー症候群をもつ子供たちが日常でぶつかる壁の攻略法を 9 歳の女の子が友達のために書いた本(アメリカ)
- ・ Fire Safety
火事の防災対策に関する本(オーストラリア)

自閉症に関する SMIL プレゼンテーション

- ・ Something to Contribute
5 人の自閉症当事者の対談(アメリカ)

自閉症に関するビデオ

- ・ Keyaki-no-sato Now 2005
けやきの郷の紹介ビデオ






その他多数

障害者の安全で快適な生活の支援技術の開発(科学技術振興調整費)プロジェクトの紹介や、国連世界情報社会サミット公式文書、等

■ DAISY の見方

DAISY のプレイヤーで再生してください。プレイヤーがない人は、DVD に同封されている AMIS をインストールしてください。

1. DVD を入れたらトップメニューが開きます。一行目の (Install) をクリックして、DAISY の再生プレイヤーである AMIS をインストールします。
2. DVD を入れた状態で、デスクトップにできた AMIS のアイコン  をダブルクリックして、起動します。
3. ヘルプの再生が始まるので、一時停止 (Ctrl + スペースバーもしくは、一時停止のアイコン  をクリック) をします。
4. CD から本を開きます。(Ctrl + L もしくは、CD から読むアイコン  をクリック)
5. DVD に入っている DAISY 図書の題名の一覧が表示されるので、読みたい本の題名を選択して、OK をクリックします。

■ SMIL プレゼンテーションの見方

RealPlayer で再生してください。RealPlayer がない人は、下記からダウンロードして、インストールしてください。

RealPlayer10.5 ダウンロード方法

1. RealOne Player のページを開きます。 <http://japan.real.com/player/?&src=ZG.jp.idx,ZG.jp.rp.rp.hd.def>
2. ページ右下の「無償版 RealPlayer のダウンロード」をクリック ※有償版と無償版があるのでご注意ください。
3. 「ダウンロード・マネージャ」ページが開き、自動的にダウンロードが開始します。
4. セットアップ・プログラムの指示に従ってインストールしてください。

【お問い合わせ先】

国立身体障害者リハビリテーションセンター 研究所 障害福祉研究部

メールアドレス: wsis@rehab.go.jp